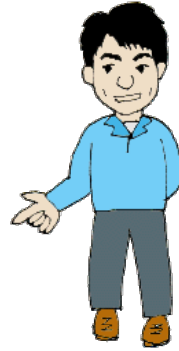


中世文書を読む (四)

胎蔵寺の文書から



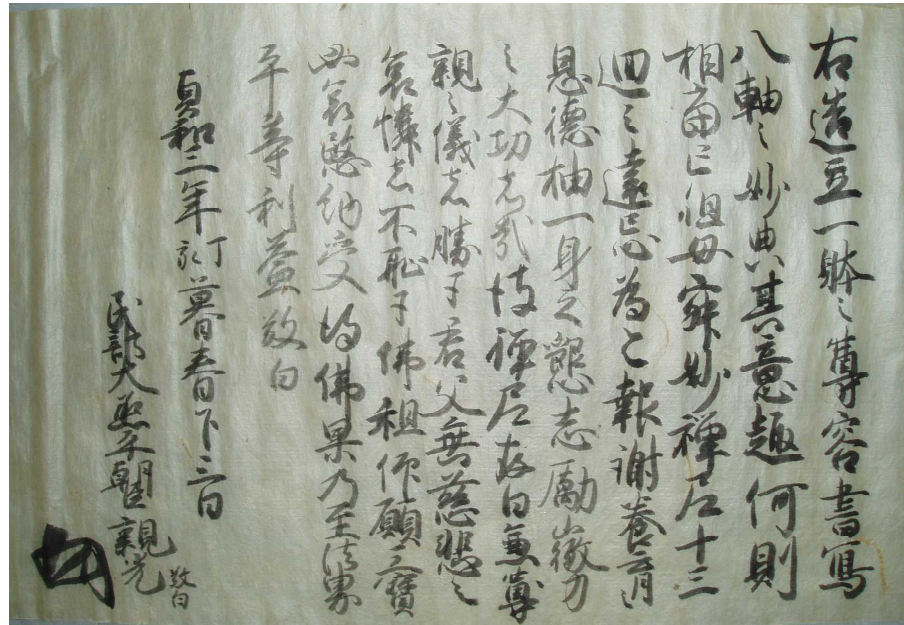
これは、福山市北吉津町にある胎蔵寺の本尊「釈迦如来坐像」の頭部に収められていた文書の一つです。妙法蓮華経を写したもので、全長が約三十八メートルにも及びます。展示しているのは、文書の終わり(一番奥)の部分です。ここに書かれている文章を「奥書」と呼びます。

この展示では、この奥書を読み解く過程を紹介します。

番号順(①~⑱)に見ていってね。

①

くずし字じゃあ、何が書いてあるかわからんよ。どう読むん？



②

今のことばに直したら、このようになるよ。



【現代語訳】

右のように、御本尊一体を造立し、八軸の法華経を書写しました。これは、今年が祖母の寂妙禪尼の十三回忌に当たるので、祖母によって育てられた恩に報い徳に感謝するためです。微力ですが精一杯心を込めて、大功が成りも尊く、親しみがあがり、また慈悲の哀れみの気持ちには仏祖にひけを取りません。三宝が必ず私を哀れと思し召し、祖母が成仏でき、また等しく仏のご利益を得られますように、心からお願ひ申し上げます。敬白。

(一三四七)ひのとい(二月二十三日)
貞和三年丁亥暮春下三日
民部大丞平朝臣親光、敬白。

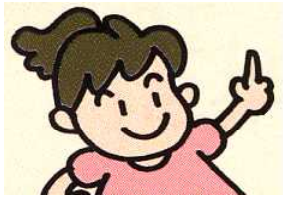
(花押)

③

奥書おくがきに記される
「尊容そんよう」(御本尊)は、
この文書が収められた
胎藏寺たいざうじの御本尊?

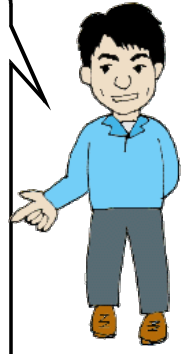


「八軸之妙典はちじくのみぎょうてん」
(法華經ほけきょう)「って、
この文書のこと?」



④

そのとおり!
この奥書おくがきから、
胎藏寺たいざうじの釈迦如来坐像しやくかによらいざざうと
この妙法蓮華經みょうぼうれんげきょうがつくられたのが、
貞和三年(一一三四七)の
ことじゃったことが
わかるんよ。



これまでは、この仏像は
室町時代の中頃(十五世紀)に
造られたと推定されとった。
でも、この奥書おくがきによって、
制作年代が約百年古いことが
確認されたんじゃ!。

ちなみに…、
現在の明王院の五重塔が完成したのが、
この翌年の貞和四年(一一三四八)のこと。
当時は常福寺と呼んどった。
この頃の福山湾岸に、
いくつかの寺院が建立されていたことが
分かるよ。

⑤

大発見なんだ!
この奥書おくがきを書いたのは、
親光ちかみつという人。
この人は、だれなん?



貞和三年(一一三四七)頃といえは、
南北朝なんぼくちゆうの動乱のまっただ中。
このとき、相原親光すきはらちかみつは、
北朝方ほくちゆうがたの室町幕府から指示・命令を受け、
浄土寺が寺領を管理したり、
塔を建てたりするのを、
妨害する人々の取締に当たっています。
したがって、彼は、
北朝方の足利尊氏あしがたかうじに味方していたこと、
備後国びんごくで活動していたこと、
が分かります。

⑦

⑥

奥書おくがきには「民部大丞平朝臣親光」と
記されています。
分解すると…、
・民部大丞…民部省という役所の職名
・平…平清盛と同じ平氏の出身
・朝臣…武士がよく名乗った身分名
・親光…この人の実名



この仏像を造り、
写経したのは、
おばあちゃんへの
恩返しみたいじゃね。

⑧



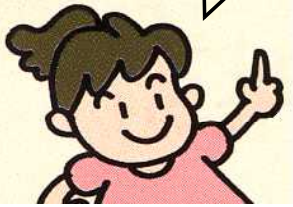
そうそう。
 「寂 妙」おばあちゃんの
 十三回忌に当たる貞和三年に、
 育ててくれたおばあちゃんに感謝し、
 おばあちゃんの極樂往生を
 願ったんじゃ。
 南北朝の動乱の
 厳しい社会情勢のなか、
 無事に生き延び成長した親光さんの、
 おばあちゃんへの敬愛の気持ちが
 伝わってくるよね。



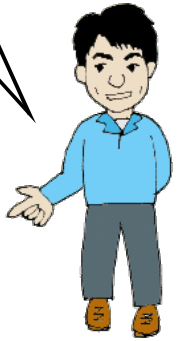
おばあちゃんも
 親光さんをとても
 かわいがったん
 じゃろうね。



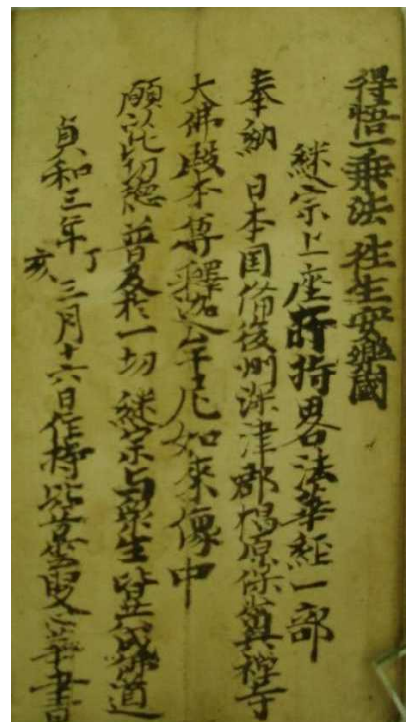
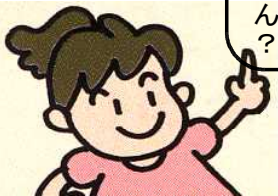
寂 妙おばあちゃん
 の十三回忌法要は
 本尊のお釈迦様の
 お披露目もかねて
 盛大に行われたん
 じゃろうね。



このお経といっしょに本尊に収めら
 れた下のお経（「略法華経」）によると、
 この本尊は「常興禅寺」の「大仏殿」
 の本尊「釈迦牟尼如来」だったことが
 分かります。
 したがって、現在の胎藏寺の本尊は、
 元は「常興禅寺」の本尊だったこと、
 「常興禅寺」は「深津郡相原保」にあ
 ったことが知られます。
 おばあちゃんの法要は、
 「常興寺」という禅寺で
 盛大に行われたんじゃろうね。



「深津郡」といえば、
 今の福山市の南東部
 （芦田川より東側）じゃろ。
 「相原保」って地名なん？
 「常興禅寺」はどこにあったん？



りやくほけきょうおくがき
 略法華経奥書

【現代語訳】

法華経の教えを学び、悟りを開いて、
 安楽国に往生したいと思う。

（以上が略法華経の経文）

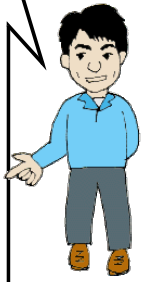
（以下が奥書）

継宗上座が所持する略法華経一部を

日本国備後州深津郡相原保にある常興禅寺の
 大仏殿の本尊釈迦如来像の中に奉納する。

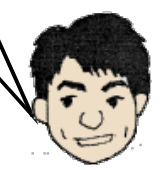
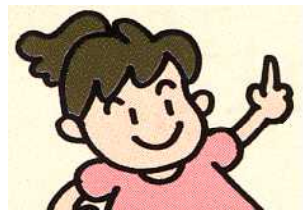
この功德を普く一切の人々に及ぼし、
 継宗とすべての人が悟りを開くことができま
 すように、ひたすらこい願う。

貞和三年丁亥三月十六日
 住持である僧 曇叟心華が書く。

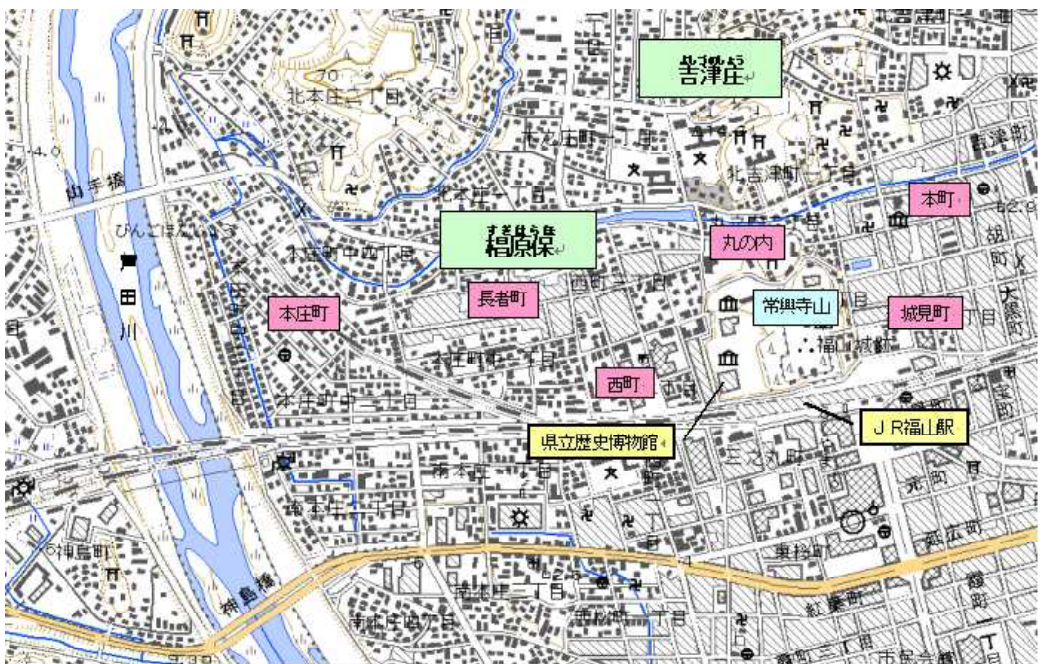


今の福山城跡の小高い丘を「常興寺山」と呼びます。かつて「常興寺」がこの丘にあったから、こう呼ぶのでしよう。つまり、「常興寺」という禅寺は今の福山城跡の丘にあったようです。「相原保」の「保」は、「莊」や「郷」と同様のことは、わかりやすく言えば、今の「〇〇町」の「町」みたいなものです。したがって、相原保は常興寺があった、今の福山城跡周辺地域のことです。

じゃあ、今の町名で言うと本町・城見町・丸の内・西町・長者町・本庄町 辺りかな。

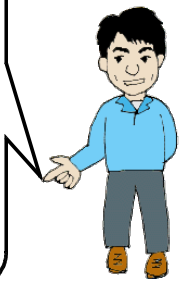


御名答！この略法華経が見つかったおかげで、相原保の位置が特定されたんだ。



これまでは、相原（杉原）氏の子孫の木梨氏が居た、現在の尾道市木ノ庄町・原田町付近が相原氏の『苗字の地』＝相原保と推定されていました。

なるほど、これも大発見なんじゃね！



こうした新発見ができたのも、常興寺から受け継いだ本尊を胎蔵寺の皆さんが信仰し、大切に保存してきたからです。

歴史の解明は、史料を手がかりとして見たことのない世界を、何とかしてのぞこうとすることです。新発見の史料により、あるいは史料の新しい解釈により、歴史の書き換えが行われます。これもまた、『歴史楽』です。